



『随筆 きょうと』

2017年 秋号
(No. 109)

扉の言葉

想い出はエッセイの宝石箱

代表 早内高士

随筆のテーマで一番よく使われるのは、人生の想い出である。甘酸っぱい初恋の想い出は、さしずめ朱色に輝く「ルビー」か、結婚は、ダイヤモンド、子宝はサファイアか。目を閉じれば、テーマは湯水のように沸いてくる。

他人には見せたことの無い、心をさらけ出した失恋や人生の失敗談の数々が、読み手を引き付ける。自慢話より、人は失敗談に興味を示してくれる。笑って、慰めてくれる。もう決して呼び戻すことの出来ない、二度と体験できない数々の想い出は、夢物語になって切ない。

今回は、夢の中から、何を引き出して書こうか。人生の宝石箱から、何を取り出して、綴ってみようか。試行錯誤してテーマを考えるのも、物書きの胸ときめく時間でもある。そして想い出の事実を歪曲して、空想の世界に遊ばせ、ドラマに仕立てると、脚本家から小説の世界へ飛躍できる。

物書きの特権、楽しみは、現在進行形の現実の世界に遊び、未来に夢を追っかけるのもわくわくして楽しい。が、一番書きやすいのは、過去の人生の軌跡を切り取って遊ぶ手法である。自分でも驚くほど、ドラマチックな人生だったと気づき、随筆が楽しくなること請け合いです。